

## 源氏物語卷名歌の成立に関する一考察

——スペンサー本「白描源氏物語絵巻」との関わり——

岩 坪 健

はじめに

江戸時代になると源氏物語が刊行され、それ以前よりもよく読まれるようになったとはいえ、全巻を通読するのは依然として大変なことであった。しかしながら源氏物語への憧れは強く、その要望に応じて巻ごとに挿絵を一図、和歌も一首付けただけのものが何種類も出版された。挿絵も和歌も各巻の名場面と名歌であり、作品により挿絵は違うことがあるが、和歌は変わらない。源氏物語で計七九五首もある和歌から五四首を、いつ誰がどのような基準で選んだのかは未だに不明である。本稿では室町時代に制作された白描源氏物語絵巻を用いて、その手掛かりを考察する次第である。

## 一、卷名歌の分類

問題の五四首を本稿では、卷名歌と呼ぶことにする。まず和歌の本文に卷名を含むかどうかで大別すると、含むのが三七首と全体の七割近くを占める。とりわけ注目されるのは、藤裏葉の卷である。五四首のうち五二首は登場人物の詠歌であるのに対して、藤裏葉・若菜下の二首だけは登場人物が口ずさんだ古歌である。藤裏葉の卷で登場人物が詠んだ和歌は二〇首もあるが、卷名を詠みこんだものはなく、卷名歌に選ばれたのは大臣（頭中将）が引用した次の歌であり、その第二句は卷名と重なる。

春日さすふぢのうらばのうらとけて君しおもはゞわれもたのまん<sup>(1)</sup>

物語中の和歌から選択しなかったのは、卷名を含むことが条件であったからと考えられる。

その卷名優先の基準を拡大解釈すると、卷名を含む和歌がない場合は卷名の一部を含む歌が選ばれることになり、それが次の五首である<sup>(2)</sup>。

六三 手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草（若紫の卷）

二六八 たづねてもわれこそとはめ道もなく深きよもぎのもとこのころを（蓬生の卷）

二七三 あふさかの関やいかなる関なれば繁きなげきの中をわくらん（関屋の卷）

四二八 花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖にあさくしまめや（梅枝の卷）

五九一 心ありて風のははす園の梅にまづうぐひすのとはずやあるべき（紅梅の卷）

六三番歌は「紫」が卷名「若紫」の一部である。同様に二六八は「よもぎ」が「蓬生」、二七三は「関」が「関屋」、

四二八は「枝」が「梅枝」、五九一は「梅」が「紅梅」の一部をなす。この五首も巻名を優先して選一された、と見なせよう。

以上により巻名を詠み入れた歌が三七首、巻名の一部を有するものが五首あり、それ以外の一二首を更に分けると、物語本文に巻名を含む和歌があるか無いかに分かれる。一二首のうち九首は巻名を詠みこんだ和歌がないのに対して、三首（葵・明石・柏木）は巻名を含む和歌があるにも拘らず別の歌が選ばれている。まず後者の三首から見ていこう。

葵の巻には巻名を取り入れた和歌が二首（一二二・一一三番歌）もあるのに、巻名歌は一一〇番歌である。

一一〇 はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む

一二二 はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしのけふを待ちける

一一三 かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

ちなみに当巻には、源氏物語で最も秀歌とされる歌がある。それは三条西実隆が一五一〇年代前半に著した源氏物語の注釈書『細流抄』で「此物語第一の歌と云々」と記した次の和歌である。

一一五 袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき

では名歌（一一五）でも巻名がある歌（一二二・一一三）でもなく、一一〇が巻名歌として選定された理由は何であるうか。一二二・一一三は賀茂祭を見に来た源典侍と光源氏の贈答歌であり、一一〇は祭に出かける前に光源氏自ら若紫の髪を削いで寿いだ歌である。両方の場面が絵にされたかどうか、田口榮一氏「源氏絵帖別場面一覧」<sup>③</sup>を用いて調べてみよう。その一覧表は絵画化された主要な場面を巻ごとに列挙したもので、一二二・一一三の箇所は掲載されていない。この巻で最もよく描かれたのは車争いの場であり、それは一一〇より前の出来事である。一一〇を描い

た作品は一覧表では少ないが、第三章で取り上げる室町時代に制作された白描源氏物語絵巻（天理図書館本・細見家本）には描かれ、一帖につき一図を選んだスペンサー本にも採られていることから、一一〇が詠まれたのは源氏絵における名場面と推測され、それゆえ巻名歌として選択されたのではなからうか。その推理は次の明石の巻にも当てはまる。

地名の「明石」に動詞の「明かし」を掛けた歌が当巻に三首もあるのに、巻名歌は二二八である。

二二八 秋の夜のつきげの駒よわが恋ふる雲ををかけれ時のまも見ん

二二二 ひとり寝は君も知りぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを

二二三 旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず

二四五 嘆きつつあかしのうらに朝ぎりのたつやと人を思ひやるかな

二二八は光源氏が初めて明石の君を訪れる途中、都に残した紫の上に思いを馳せて詠んだ歌であり、その箇所は当巻を代表する場面としてよく絵に描かれた。

巻名歌を選ぶ基準に絵が関わっているのではないか、という仮説は、次の柏木の巻にも当てはまる。

五〇一 いまはとて燃えむけぶりもむすばほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

五一一 かしは木に葉守の神はまさずとも人ならずべき宿のこずゑか

五〇一は柏木が女三の宮に送った歌で、田口氏の一覧表を見ると、その場面が圧倒的に多い。巻名を含む和歌五一一があるにも拘らず五〇一が巻名歌に選ばれたのは、源氏絵の名場面として知られていたからではなからうか。

以上の三首（葵・明石・柏木）は巻名を含む歌があるのに別の歌が巻名歌になり、いずれも源氏絵として有名な場面であつた歌であることが判明した。では巻名を含む和歌がない九巻（桐壺・紅葉賀・花宴・絵合・野分・若菜下

・匂宮・手習・夢浮橋)の巻名歌も、絵と関わるかどうか見ていこう。ただし匂宮・夢浮橋は巻を通して登場人物の詠歌が一首しかなく、それしか選べないので考察から外す。

八 いときなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや(桐壺の巻)

八四 もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや(紅葉賀の巻)

一〇四 いづれぞと露のやどりをわかむまに小笹が原に風もこそ吹け(花宴の巻)

二七七 うきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か(絵合の巻)

三八九 風さわぎむら雲まがふ夕べにもわするの間なく忘れぬ君(野分の巻)

夕やみはみちたどくし月まちてかへれ我せこそまにも見ん(若菜下の巻)<sup>(4)</sup>

七六七 身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけてたれかどめし(手習の巻)

八番歌は光源氏の元服、八四は青海波の舞の後、一〇四は朧月夜との出会い、二七七は絵合の準備の場面で詠まれた。三八九は夕霧が雲居雁へ送った和歌、「夕やみは」の歌は女三の宮が口ずさんだ古歌、七六七は蘇生した浮舟の独詠歌である。この七首のうち最初の三首はよく絵画化された場面であり、あとの四首は田口榮一氏の一覧表にあるが別の場面の方がよく選ばれている。

以上の考察をまとめると、次のようになる。

A、巻名を含むのが三七首。そのうち藤裏葉は古歌。

a、Aに準じて巻名の一部を含むのが五首。若紫・蓬生・関屋・梅枝・紅梅。

B、巻名を含まないのが一二首。

B1、巻名を含む歌があるのに不採用が三首。葵・明石・柏木。三首とも源氏絵では有名な場面。

B2、巻名を含む和歌がないのが九首。ただし句宮・夢浮橋は全一首しかないので除くと、桐壺・紅葉賀・花宴・

絵合・野分・若菜下・手習の七首。

巻名歌の選択方法は原則としてAとaのように巻名を含む歌であるが、B1のように巻名よりも源氏絵における名場面を優先することもある。B2のように巻名を含む歌がない巻の場合も、よく絵画化されるかどうかが基準にされたかと思われる。よって巻名歌は二種類に分けられ、巻名を含む「巻名の歌」と、その巻を代表する「巻の名歌」であり、後者の場合は絵との関連が想定される。

## 二、巻名歌の古い例

巻名歌と絵を組み合わせた作品として古い例は、『女源氏教訓鑑』である。以下、小町谷照彦氏の解説を引用する<sup>(5)</sup>。

『源氏物語』が往来物・女訓書の形で比較的早く取り上げられて流布したものととして、『女源氏教訓鑑』がある。「中略」山本序周（山朝子）著で、正徳三年（一七二三）版、「中略」寛政八年（一七九六）版など、大本の体裁で多数刊行されたとある。「中略」『女源氏教訓鑑』の『源氏物語』に直結する本文部分は、最初に「源氏六十帖目録并に本歌五十四首」として、全巻名と「山路の露」「けい図」「目安」「同中の巻」「同下の巻」「引歌」の項目が掲げられ、ついで、各巻に二丁を当て、各丁の表に、巻名と引歌（巻にちなむ歌）を添えた場面絵が描かれ、裏に、巻名と源氏物語香図（源氏香文様）が示され、巻名の由来、語釈、あらずじ、引歌の解釈などがかなり詳しく説明されている。

私に傍線を付けた箇所「引歌」が本稿でいう巻名歌であり、この巻名・巻名歌・場面絵の三点セット、源氏香も入れると四点セットは定番となり、一九世紀にも流布した。たとえば小町谷氏の著書（注(5)の書）に影印が収められた『源氏物語絵尽』『秀玉百人一首小倉栞』『女大学玉箱』『群花百人一首和歌藪』『御家百人一首千歳文庫』は一八世紀から一九世紀にかけて刊行されたもので、いずれも三点または四点セットから成る。

巻名歌を選んだ人は不明だが、三条西実隆と伝承する著書がある。それは『源氏五十四帖かな文』で、各帖に前述した四点セットを載せ、末尾に「西三條追遙院殿御作」と記す<sup>(6)</sup>。しかしながら伊井春樹氏は、「実隆の作とするのは疑わしく、仮託なのである。」<sup>(7)</sup>と判断された。確かに実隆作と見なす根拠はないが、その原形は室町時代まで遡れるのではないか、ということを次章で論じる。

### 三、スペンサー本「白描源氏物語絵巻」

ニューヨーク・パブリック・ライブラリに所蔵されているスペンサー・コレクションの中に、白描源氏物語絵巻がある。全六巻からなる完本で、第六巻巻末に本文と同筆で「本のことくうつし申候、おかしきふてのあと御らんしわけかたふ候、天文廿三年四月吉日」と書かれていることから、天文二三年（一五五四）に制作されたことが知られる。また第一巻巻頭の見返しに「近衛関白種家卿息女慶福院玉栄筆絵とも」という極め書きがあり、これによれば玉栄が二九歳のときの作になる。一帖につき絵が一図ずつあり、各図の前に登場人物の詠歌状況を記した物語本文・詠者名・和歌が書かれている。

五十四帖それぞれ一帖に一段ずつを描くのを基本とするが、第五巻で「二十七の並び紅梅」が抜け、第六巻では

「宿木」、「手習」の二帖を二段ずつ描くため、合わせて五十五段となる。詞は「宿木」第一段の例外を除いては、物語本文中から詠歌場面を選び出し、その詠歌の事情を詞書風に述べたものと詠者名を和歌の前に加えてつくられている。<sup>(8)</sup>

和歌は全首ではなく、例えば桐壺の巻は計九首のうち二首しか選んでいない。では和歌と絵の選択基準は何であろうか。

スペイン本、というよりはスペイン本の原本は、細見家本、天理図書館本のような『源氏物語』中の和歌をすべて抜き出し、絵画化した絵巻を参考にして制作されたのは間違いないだろう。つまりスペイン本は細見家本、天理図書館本のような絵巻の抄出本として制作されたと考えてよいのではなからうか。そして一帖から一段を選ぶ基準は、詞は巻名を含む和歌がある段が原則として選ばれた。しかし絵の方は必ずしもそうではなく、絵そのものの面白さや著名な場面であることから他の段の絵が使われたり、数段が合成されたりしたのである。

(注(8)の論文。傍線は引用者による)

傍線部の「巻名を含む和歌」と巻名歌との関係を調べてみると、スペイン本(計五三巻)で巻名歌がないのは八巻のみである。そのうち藤裏葉・若菜下の巻名歌は古歌であり、登場人物の詠歌から選ぶスペイン本では採用できないので考察から外す。残りの六巻(若紫・須磨・絵合・少女・玉鬘・柏木)のうち柏木の巻名歌(第一章に掲載した五〇一番歌)は巻名を含まず、スペイン本は巻名を含む歌(前掲の五一一)と五一〇の贈答歌のみを引用している。これは巻名のない巻名歌よりも巻名のある和歌を優先したからと見なせる。

逆に若紫・須磨・少女・玉鬘が巻名を含む巻名歌を採用していないのは、絵を考慮したからではなからうか。巻の順に巻名歌とスペイン本和歌の解説を、／を挟んでそれぞれ列挙する。

○若紫の巻。光源氏が若紫を思った独詠歌／北山で光源氏が若紫を垣間見たときの尼君と女房の贈答歌。

○須磨の巻。六条御息所が伊勢から須磨にいる光源氏に送った一首／光源氏と従者たちが須磨の海を見ているときの唱和歌。

○少女の巻。光源氏が五節だった藤典侍に送った一首／夕霧が惟光の娘に送った一首。

○玉鬘の巻。光源氏が玉鬘を思つて詠んだ独詠歌／長谷寺で遭遇した右近と玉鬘との贈答歌、および光源氏と玉鬘との贈答歌。

田口榮一氏の一覧表を見ると、巻名歌の場面よりもスペンサー本の方がよく絵に採られていることが分かる。残りの総合の巻は巻名を含む歌がなく、巻名歌は総合の用意をしている光源氏が紫の上に返した歌である。一方スペンサー本の三首はすべて藤壺主催の総合で詠まれたもので、これもスペンサー本の方がよく絵画化されている。

次に、スペンサー本が巻名歌を採用した四五巻を取り上げる。ただし匂宮・夢浮橋は全一首しかないので考察から外すと、それ以外で巻名を含むのは三六首もあり、巻名が優先されている。この中には巻名の一部を含む蓬生・関屋・梅枝も入れている。次に巻名を含む歌があるのに、巻名が無い巻名歌を採用したのは葵・明石で（和歌は第一章に掲載）、これは巻名より巻名歌を優先したからであろう。残る五巻はいずれも巻名を含む歌が一首もないのに、巻名歌を採用している。順に見ていくと、桐壺は計九首の中からスペンサー本は巻名歌を含む二首を引用している。以下、紅葉賀は一七首から二首、花宴は八首から三首、野分は四首から一首、手習は二八首から六首を選んでゐる。紅葉賀の一七首中の二首は一二パーセント、すなわち選択率は一割強である。これは偶然ではなく、スペンサー本が制作された一六世紀中頃には巻名歌が確立しつつあったのではなからうか。

## 四、和歌・連歌史における卷名

最後に和歌史における卷名歌について考察する。源氏物語を踏まえて和歌を詠むことは寺本直彦氏の調査によると、和泉式部や赤染衛門など紫式部周辺の人々が夙に行なっていた<sup>(9)</sup>。それ以降については、

十二世紀後半院政時代には俊成あたりが原動力になって、和歌に源氏物語が詠ぜられることが多くなってくる。その場合「寄源氏(物語)恋」と題されたものが多いが(千載集、清輔朝臣集、頼政集、忠度集、経正朝臣集、小侍従集など)、その内容はいずれも源氏の卷名を詠み入れたものである。

十三世紀中葉には源氏五十余帖の卷名を幾人かが採題によって分かちとり、それぞれ歌に詠ずるといふ風があった。<sup>(10)</sup>

と、寺本氏はまとめられた。たとえば寺本氏が指摘された以外にも、一二七〇年代前半に成立した『人家和歌集』には、内裏の歌会で桐壺の巻の内容を踏まえて詠まれた和歌が採られている。<sup>(11)</sup>

内裏にて源氏のまきまきを題にて歌よみ侍りけるに、きりつば

四七二 すみまさるいけの心にはあらはれてもとのこだちのかけもみえけり

中世になると、源氏国名連歌が盛んに行なわれるようになった。それは「源氏の卷名と国名とを長句、短句に交互に詠み入れてゆく」もので、「源氏卷名に関していえば、和歌における詠源氏卷名和歌の影響があるとも考えられる。」と寺本氏は推定された(注<sup>(10)</sup>の著書、三八一頁)。また同氏は二条良基著『筑波問答』『僻連抄』の記述により、

源氏国名が賦物の一種として後鳥羽院時代から始まったこと、賦物は一般的には良基時代には衰退してきている

が、源氏国名は良基時代にもしばしば行なわれたことがうかがわれる。(注(10)の著書、三八二頁)

と論じられた。そのほか初句に卷名、第二句以下に源氏物語の連歌寄合を詠みこみ一首に仕立てた伝藤原定家作「光源氏卷名歌」も、卷名を意識していると見られる<sup>(12)</sup>。

また、源氏物語の注釈書と梗概書において、「卷名と、その由来を述べる短文乃至、本文中の和歌一首を引用するだけの形式が、中世を通して一つの流れをなしている。」と稲賀敬二氏は説かれた<sup>(13)</sup>。それについても寺本氏は、卷名との関連を示唆されている。

このような卷名注(岩坪注、卷名の注釈)の発生は、もとより源氏物語の尊重、源氏物語に対する研究意欲の結果であるといえようが、その発生をうながした誘因の一つは、中世歌壇における詠源氏物語和歌の流行、特に源氏卷名を題とする詠歌が行なわれたことではなかったろうか。(注(10)の著書、九二三頁)

卷名を全首にわたり詠みこむことは困難であるので卷名にこだわらず、巻の内容を踏まえて詠む試みも行われた。有名な例としては天文二年(一五三三)に三条西実隆が一人で五五首(雲隱の巻を含む)詠み、「詠源氏物語巻巻和歌」と題して石山寺に奉納した。江戸時代には上田秋成や松平定信らも試みており、五四首詠む営みは江戸時代まで続いている。その流れに連動して、五四首の巻名歌が選定されたのかもしれない。

## 終 わ り に

江戸時代において源氏物語は、百人一首とセットで享受されていた。

『百人一首』の版本などには、古典教養の一つとして、『源氏物語』に関心を持たせるために、「源氏物語香図引

歌「源氏五十四帖引歌香図」などと題して、『源氏物語』の各巻の挿絵や和歌に源氏香文様を描いたものを付載しているものがしばしば見られ、(注⑤)の著書、九六頁)

百人一首が寺子屋で教えられていたように、源氏物語も巻ごとに選定された五四首の和歌が入門編となり、また各巻の象徴として受容され流布したのであろう。

その一方、従来の巻名歌とは違う作品が現れる。たとえば江戸時代後期に制作された「源語」(同志社大学図書館蔵)は源氏物語の帖ごとに和歌一首と絵を一図ずつ選び卷子本に仕立てたもので、和歌は五四首すべて登場人物の詠歌である<sup>(4)</sup>。このうち巻全体で一首しかない二巻(匂宮・夢浮橋)を除いた五二首のうち巻名歌と一致するのは二六首、すなわち半数しかない。異なるもののうち一五首は巻名を含む巻名歌を捨てて巻名がない和歌を採り、巻名離れが進んでいる。これは特殊な例なのかどうか、今後も調査を進めていきたい。

## 注

- (1) 当歌の本文は、第二章で取り上げる『女源氏教訓鑑』による。正徳三年版(国会図書館蔵)の影印を取めた、中島義彦氏『山本序周『女源氏教訓鑑』—江戸の『源氏物語』梗概書(武蔵野書院、二〇一三年七月)を用いる。なお和歌の本文に、私に傍線を付す(以下、同じ)。
- (2) 源氏物語和歌の本文と歌番号は『新編国歌大観』による。
- (3) 『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』所収、学習研究社、一九八八年六月。
- (4) 本文は注(1)の『女源氏教訓鑑』による。
- (5) 小町谷照彦氏『絵とあらずで読む源氏物語』一〇三頁、新典社、二〇〇七年七月。
- (6) 本文は早稲田大学図書館蔵(九曜文庫旧蔵)本による。
- (7) 伊井春樹氏編『源氏物語 注釈書・享受史 事典』東京堂出版、二〇〇一年九月。

- (8) 片桐弥生氏「白描源氏物語絵巻における絵と詞―スベンサー本を中心に―」、「フィロカリア」6、一九八九年三月。なおスベンサー本は、佐野みどり氏『源氏絵集成』（藝華書院、二〇一一年一月）に全図が収められている。
- (9) 寺本直彦氏『源氏物語受容史論考 続編』第一部第二章、風間書房、一九八四年。
- (10) 寺本直彦氏『源氏物語受容史論考 正編』九一・九二・九三頁、風間書房、一九七〇年。
- (11) 新編国歌大観に収められた『人家和歌集』の解題は以下の通り。「撰者藤原（九条）行家は六条知家男、続古今集撰者の一人。集の成立は現存零本の詞書から推して、文永八年（一二七二）以後、行家没の文永十二年（一二七五）正月以前と考えられる。」
- (12) 『山頂湖面抄』は文安六年（一四四九）に比丘尼祐倫が著した「光源氏卷名歌」の注釈書で、今井源衛氏・古野優 子氏『山頂湖面抄諸本集成』（笠間書院、一九九九年）に翻刻されている。ちなみに広島県にある中世の草戸千軒町遺跡から発掘された香札には、「は、木、」「あふひ」「すま」と書かれている。これも巻名を意識した表れであろう（矢野環氏「寄合の場「会所」の文芸」、「よくわかる伝統文化の歴史」② 茶道・香道・華道と水墨画 室町時代』六三頁、淡交社、二〇一六年一月）。
- (13) 稲賀敬二氏『源氏物語の研究 成立と伝流 補訂版』一九頁、笠間書院、一九八三年。
- (14) 『同志社大学所蔵「源語」の紹介―翻刻・現代語訳・解説―』と題して、公表する予定である。

